

吸血鬼

shiroa

「お願いがあるんだ」

僕はセックスの後で上気した彼女の顔を、優しく撫でながら言った。

「僕にはちょっとした、人と違う趣味というか、嗜好があってね。ま、その、結論から言うと血を舐めさせて欲しいんだ」

彼女は眠そうな目で僕を見ながら、軽く笑った。「あなた吸血鬼？」

「なんでもいいよ。小さいころからさ、血の味がなんとなく好きだったんだ。怪我をすると、好んで傷口舐める子だった。小動物じゃないけど、そんな子っていたろ？」

彼女は僕の話しをほとんど聞いていないのか、眠そうに目を閉じながら頷いていた。

「ねえ、ちょっとだけ舐めさせてもらってもいい？」

「だめ」

「エッチはできても血は駄目なの？」

「違うモノでしょ。それより、明日も仕事だから早く寝ようよ」

彼女はそれ以上取り合わないことを宣言するように、布団の中で寝返りをうった。「おやすみ」僕は仕方がないので一人布団から出て、カッターナイフを手にとった。自分の手首の皺に合わせ、浅く傷口を開き、少し出てきた血を舐めて、僕は一人で欲求を満たした。なんかオナニーしてるみたいだった。

「何やってんのよ。寝ようよ。電気消してよ」

「ああ、すぐに消すよ」

言われるまま、僕は電気を消した。

布団の中で考えていた。どうも僕の嗜好というのは人に理解されない。それは仕方がないことだと自分でも思う。別に毎日血を舐めないと気持ちが落ちつかないとか、禁断症状が出てくるとか、そういうのではないけれど、偶に発作的に血の味を欲することがある。そんな時は仕方がないので自分の血を舐めて我慢していた。血がおいしい、というのは尋常の感覚ではないだろう。だけれども、蚊が血を吸うように、血は生きるための食料の一つだと考えられないか。

赤ちゃんが飲む母乳も、もとは血から作られてると聞いたことがあるし、お腹の中にいるときはもっと直接的に、臍の緒を通して血を貰っている。ごくごく自然の一部として、人は血を食している筈なのだ。肉を食べるときにも、それに血は混じってるし、レバーなんかはほとんど血を喰らってるようなものじゃないか。そんなことを考えれば、僕のように血を愉しむ、というのは別におかしなこと、倫理に背くことだとは思わないのだけれども。

次の日部屋で夕食を摂っているとき、彼女は昨日の話を持ち出した。

「ねえ、昨日の晩、寝る前にあなた変なお願いしてたでしょ。眠くてよく覚えてないけど、何が

言いたかったの？ 何か冗談言ってたように思ったけど」

僕はなんとなく本当のことを言うべきか躊躇った。どうせ言っても理解してもらえないだろう。笑われておしまいだ。

「ああ、なんでもないよ。エッチの後にドラキュラ思い出して、吸血鬼ごっこしようと思ったんだよ」

彼女は僕の目を覗き込み、「嘘ね」と言った。時々僕をどきっとさせるくらい、鋭い直感を働かせる。そんな時はいつも彼女には敵わないと怖じ怖じしてしまう。

「私が寝返りをうった後、一人で何かしてたでしょ。私がお願い断ったものだから、自分の舐めて我慢してたんじゃない？」

なんだ、よく覚えてないとか言って、しっかり覚えてるんじゃないか。

「そうだよ。お前が舐めさせてくれないからさ。仕方ないから自分の血を舐めて我慢してたんだ」

「でもなんで私の血を舐めたいわけ？ 自分の血で済むのなら、愛する人の体をわざわざ傷つける必要もないじゃない」

愛、という言葉にまたどきりとした。なんで女はこの言葉をこう気軽に口にできるんだろう。と考えつつも、僕は勇気を振り絞って告白することにした。

「結論から言うとね、愛してるからだよ。今まで何人かの女性と出会ってきたけど、僕の価値観を分かってくれる人っていなかったんだ。僕が男で、それなりにルックスが良いから付き合ってた、みたいなの。僕という人間を愛してるんじゃないかと、僕という男を自分の欲望を充足させるために利用してただけに感じられたんだ。けどお前は違ったんだよ。ちゃんと僕の趣味を分かってくれたし、僕がやろうとすることに理解を示してくれた。そんな人初めてだったし、エッチの相性も良かったしね。

いろいろ悩んだんだけど、昨日思い切って告白することにしたんだよ。これからはさ、ずっと一緒にいたいから、もっとずっと僕を知って欲しかったからさ」

彼女の目が鋭く光り、口許が意地悪に歪んだ。

「それってさあ、遠回しなプロポーズかい、君ィ」

また僕をどきどきさせる言葉を言う。何か弁解しようかしらまいか迷ったが、ええいままよ！と思い切って僕は言った。

「……そうさ、そうだよ。ずっと一緒にいたいんだよ。僕の一番の理解者だって思ってるからね。僕をずっと見捨てずにいてくれるなら、お前をずっと守り続けるって約束するよ！」

僕が半分泣きそうに顔を崩しながら言い切ると、彼女は大声で腹を抱えて笑い出した。僕はなんだか恥ずかしくなって、グラスのビールをいっきに飲み干した。ひとしきり笑い終わると、彼女は潤んだ目で僕を見つめた。

「吸血鬼の求婚？ まあそれは良いとして。OK、結婚しましょう。血を舐めたいという変質的な趣味嗜好も受け入れてあげるわ。なんか儀式っぽいし、私たちだけの二人の秘密って感じでもいいかもね」

彼女はくだものナイフを持ってくると、自分の指を軽く傷つけた。赤黒い血が指先に滲む。彼

女はそれを僕の口許に近づけてきたので、僕はそれを舐めた。

おいしい。涙が出てきた。

「……ありがとう」

僕は彼女を抱きしめようとした。すると、彼女はそれをピシヤリと拒んだ。

「次はあなたの番よ」

そういうと彼女は僕の指に遠慮なくナイフで傷を付けた。ちょっと、そこ痛いよ。ちゃんと痛点とか傷の深さ考えて刺してよ。僕の指からすっと垂れるほどの血が出てきて、それを彼女は舐めた。彼女の髪の毛から漂うアセロラの匂いが、ぷんと僕の鼻孔を刺激した。

「おいしいわ」

痺れるような喜びの快感と共に、不安が小さく胸中で生まれた。